

聖誕七五〇年の意義の究明

室 住 一 妙

ここにセカイがある。——大宇宙の中の、小さい小さいセカイ、それは私のセツナの、そして最高の価値あるものは、永遠の全宇宙にもつながっていくようなもの——たしかに、かすかなものながら、絶大の展開をふくんでいる。この標題の意義が、それを充たすだろうと期待する。

日蓮聖人が日本に生れられてから、七五〇年の今年、今日我々がこうして生きている今日、たった今のこの一念がこの標題の意味を真面目に考えようとする、私の全存在の一生乃至生々世々かけても。

だが、たった今、ほんのざっとでも考えたい。まづ外から見る。七五〇という年数は今の常識的感では、相当多量の年代である。そのイミを味わうために、古い言葉の人生五十年で測ってみると十五人、最近日本の平均寿命でふんでみると十人位。また大聖人の御一生満六十年でふんでみると、今の我々は第十三代半ば、もっと内容の充実した精神年齢（三十才以上）の世代であててみると、我々は第廿六世に当る。つまり、二・三十人のすぐれた行者たちがうまく手をつなぎ、バトンをうけわたしてきたとしたら、今の我々にちゃんと法財がいただけである。そういうまことにおめでたい空想である。しかし確か算数上の距離ではある。問題はその肉身同士でも手渡してできることではないのが、実のこの意味とか意義とかの問題である。之はまたあとでふれるとして。七五〇年の時限で日本国史に押

しあててみると、丁度中間である。朔った頂きは雄略帝(倭王武)の頃、そこから降って、仏教伝来・聖徳太子・奈良大仏・最澄・空海・平安の貴族政治と仏教、そしてその類落くづれの末が仏教史の末法時代・鎌倉の大変動期に入り、そして聖誕となる。

その大聖がどんな人でどんなイミをもつかはしばらくおいて、その人から約三〇〇年間は南北・室町・戦国・織・豊を経て江戸二六〇年、そして明治百年を通じて今日に到る。自然必然として、年代が降るにつれて質量ともに複雑多様激変の度は加速されてきている。その時代々々の人々が、日蓮という一人物をどのように見たり仰いだり、帰依したりしたか、そのイミは全くまとめにくい、進歩か退歩か方向すらわからない。

現代の今日、「71年」という語がはやる。昭和四十六年という今年、一体どんな時代の年か、一寸形容詞がみつからぬ。しいていえば、えたいのわからないセカイ的ウツの中にあるといえよう。そのはげしいウツの中で、「日蓮大聖人降誕の意義」を見ようとし考えようとする。

而も幸か不幸か、その畑、本山の宗団の内部にあって見ようとする。しかも虚像でなく実像を、むしろ真像をとらえようとするのだ。全く難信難解以前の難見難取である。ともかくも、燕雀の志でも志は尊いだろう。大鳳の一彩でも結構である。身のほどをかえりみずして、ノミトリマナコでも、できるだけ大よその、タシカなスケッチでもとりたい。

その一つの試みとして、次に項目を挙げておいて後日のためのメモとする。

①その人の生育(精神と肉体) ②学習期 ③而立問題(十二才求道出家後滿二十年、三十二才の大自覚・奮起を

意味し、ここにこそその人の個人が大きな容体から自覚しそして、働きかける。その構造が教機時因序の五義) ④名

義（之はお名前のイミのことで、その行動・主張・誓願等をふくめた象徴で、ただ偶然に名のられた名称ではない。）
⑤宗宣言。……。

七五〇回の聖誕の日を迎えて思うには、その人自身の真意をしっかりと受けとることが第一に肝心である。それには、さきの①～⑤等と究明すべきだが、今ここではまづ結論的に⑥についてだけ述べる。

宗宣言というのは私造語だがイミは、①宗祖御自身が、いのちをかけ、生活も生涯もかけてなされた主義、②また個人的にも群衆の間にも布教なされその間に一貫して生涯を貫き万人に教示なされた教誡条々の原理。③また公的には社会国家に対して思い切った断言。そこにはアイマイもハッキリも妥協も許されぬ、公明正大な主張。根柢はもとより、天地の公道、組織的教体系をふまえている。④それはたしかに、「日蓮が弟子檀那」等と常にいわれている社会集団即ち教団としての綱領宣言である。今の「日蓮宗憲」といわれるものに当る。⑤以上のことは時代社会の風潮により、或は集会の都合によりイミや解釈がちがったりしないことが重要である。それは末法万年これから九十世紀間は少くとも、全世界に生きて働くべき体系であり、全人類の精神的憲法ともなるべきものである。その一例として

日蓮が慈悲曠大ならば 南無妙法蓮華経は 万年の外 未来までも ながるべし 日本国の 一切衆生の盲目を
ひらける功德あり 無間地獄の道を ふさぎぬ

之は正に日本及び世界人類が一举に、一口にのみほして、精神的生命が助かり、導かれていき、仏寿無量が保証されるという一大秘法である。之を唱導実践した人、さらに大宇宙の完成の責任者が、いわゆる「ジヒコウダイ」の日蓮その人である。それについての手近かなやさしい話をしてわからせることを、「日本国は一切衆生の盲目をひらけ

る功德」ともいい、その反面、厳しい誠めとして、「無間地獄の道をふさぎぬ。」とも仰せられた。あれから七〇〇年、はたしてどうなってきたか。ともかくも、今日の我々は今、幸か不幸か、二者択一をせまられている。日蓮門下僧俗一般にかぎって中間はない。そこが恵まれている点。即ち、「すぐと仏と成るか」・「きつとアビ地獄におつるか。」慶讃か凶惨か。——たれさがる御題目のいのち綱地獄の底に今し吾とる。

もう一つ突いて考えてみよう。

ただ今、日蓮宗（広義の）が全日本国民・全世界人類に対し、七〇〇年余りのその歴史的存在にかけて、自体を宣言することは（宗宣言）が「日蓮宗」である。今の我々が、たといよくはわからなくとも、日蓮宗という宗団に属しているかぎり、当然責任を負うべきものである。ほんとうの処、こと信仰に関するかぎりは、法律・道徳・生命以上の重大重要な、いわば無限責任の信条である。今、委細のことは、さておき、ただ掲げられた宗団のキャン「日蓮宗」という三字は、それ自体、立派に堂々と世界の人類及び生類にまで、よびかけている。

その人が、たしか晩年のお手紙に、

丈六のそとばをたてて、その面（をもて）に南無妙法蓮花経と七字を顕はしてをわしませば北風ふけば南海のいろくづ（魚族）その風にあたりて 大海の苦をはなれ 東風来れば 西山の鳥鹿 その風を身にふれ 畜生道をまぬがれて トソツの内院（ミクロほさつの現在する天上界の宮殿）に生れん いわんや かのそとばに随喜をなし 手をふれ 眼に見まいらせ候人類をや（一七一八）

このお手紙の意味を推してくると、日蓮宗ということばをあやつる人や、そのイミを多少思える人、ましてや信じ行じていると自信している人々の功德は、いかに莫大であろうか全く想像を絶すると思う。

こころみに、今新ためて、日蓮という字を見、ニチレンというひびきをきいただけでも、だれでも日本人はもとより、セカイの人類はなんとなく一種鮮烈なショックを受けるだろう。はてない上からくる尊い光に射されて地底から感激の力が湧き出るだろう。ましてや、日の文字とイミ、蓮の語源や実物とそのイミ、それらの連環を思わさせられるとき、なおさらであろう。

それらすべて自ら承知して自分自身の名とした人、そのようにふるまうた人、たしかその人の自覚表現・行願の象徴なのである。

闇なれども 灯入りぬれば 明かなり 濁水にも 月入りぬれば すめり 明かなること 日月にすぎんや 淨きこと 蓮花に まさるべきや 法花経は日月と蓮花となり 故に妙法蓮花経と名づく 日蓮また日月と蓮花との如くなり 信心の水すまば 利生の月 応をたれ 守護したまふべし (四八四)

之だけを拝してみても世界第一ふしぎな宗教ではないか。さらに、その根柢ともいえるものを示されている。

一切のものにわたりて 名の大切なること是なり さてこそ 天台大師は五重玄義の初に名玄義と釈したまへり 日蓮と名のすることは自解仏乗とも いろいろ かつやうに申せば 利口げにきこえたれども 道理のさすところ さもやあらん

經に云く 如日月光明 能除諸幽冥 斯人行世間 能滅衆生闇 と 此の文よくよく案じさせたまへ 斯人行世間の五つの文字は 上行菩薩 末法の始の五百年に出現して 南無妙法蓮花経の五字の光明を さし出して 無明煩惱の闇をてらすべしと云ふことなり 日蓮等 この上行菩薩の御使として 日本国の一切衆生に 法花経をうけたもてと すすめしは是なり 此山にしても をこたらず候なり 今の經文の次ぎ下に説いて云く 於我滅度後 応

受持斯經 是人於仏道 決定無有疑 と云々

かかる者の弟子檀那とならん人々は 宿縁ふかしと思つて法花経を弘むべきなり(一六六九)

その「宿縁深い」我々のために、さらに解説して

いかにも今度、信心をいたして 法花経の行者にて通り 日蓮が一門となり通したまふべし 日蓮と同意ならば 地涌の菩薩たらんか 地涌の菩薩にさだまりなば 釈尊久遠の弟子たる事 かに疑はんや 経に云く 我従久遠來 教化是等衆とはこれなり 末法にして 妙法蓮花経の五字を弘めん者 男女はきらふべからず 皆地涌の菩薩の出 現にあらずんば 唱えがたき題目也(七二六)

ここに「日蓮が弟子檀那」といわれた当時数百人の小集団は、今七〇〇年後の今日幾千万の大きな形骸を擁して、ここに在る。おづしの中にかがやくお像をただ拝むのでなく、この恐しい時点で、日蓮という人物ははたして何者なのか、現代の人類にとってどんなイミがあるのか、その魂は何を宣言し絶叫するのか。ちかによく聞こうとしないでよいのかどうか？ここにたしかに問題がある。今までは、あちらさまのいわれたことを、できるだけ純粋に客観的にききとろうとした。それはそれで、たしかに絶対である。だが、問題は人間をどうする、今の我々及びこれからの人類の運命にも使命にもかかわる問題はそこに無いのか。しっかりと考えたいと思う。

今までの宗団史に出てくる六老僧たちのこと、分裂して門流をなし派の争い寺の争い教義の争いやら競い、権力と利用したりされたり、そして最後は裸体の屈従等々は、しばらく研究室に委そう。そして

△伝統狂嚴文化財利権等のいろいろは宗祖に奉還しよう。△伝承教義信条等そのまま一時凍結、夏日を期そう。△そして新たためて、日蓮大聖人とはどんな人なのか。どんな宗教を開かれたのか。その理由と根拠と実力と実証とを我

々によくわかるよう、お聞きしよう。△それこそエンリョなく、現代っ子の我々がもついろんな問題（但し一番大事だと信ずること）をきいたらいい、充分ときいて考えて、ギロンしたらいい。その上で気に入らねば、おん出てゆく。もしもなっとくできたら打ち込もう。生命はもとより、残っている私有財産全部ささげよう。（ここに六年前の「日蓮大聖人と俱に」の詩の一節をひく）——△

われわれは、もっとも賢明になるよう、勉強しなくてはならないだろう。時代についても社会に対しても、世界の情勢はもとより、人間個々についても現実の生活についても、一人前の常識はもちたい。また、さらにまともに考える力はなくしてはならぬ。

だが、しかし、ともかくも、この時代や世界をひきさいて、仏の世界を實現していく、そういう道のあるところを、聞くだけでも、世界第一の重要な事件ではなからうか。——そうだとすれば、

「日蓮大聖人と俱に」というだけでも、宇宙最第一の光榮だと信じてもいいのではなからうか。
名実めいじつの伴ともなえば、なおなおのこと。

△

ふと、だれでも見る。みたら 読む。よんだら 考える。かんがえろと、いのちの魂にふれる。ふれたら、じっとして いられぬ。さぐる、さぐる。思う、思う。よるもひるも。そして、大聖人さまの前に、ひざまづく。あとは一対一、そして 絶対の一。

そこは、世界も宇宙も、寂とかな光が、いっばいに、生き生きしてる地上である。（一已上）

ここに於て、百千万の男女の聖者が一挙に御誕生なさる。何よりもおめでたいこと。その人個人にとつても 日本中・世界全人類にとつても とても めでたい。毎年々々聖誕の連続、かがやく世界史が創つたのだ。

それは空想か夢想か??我々は今、赤裸々な人間としてここに在る。大聖人も亦七五〇年前、ある日たしかに母胎から生れた。お互い なま あたたかい この現実で 話し相わう。あらゆる肩書や教養のつまらぬ部分は すて去つて 素直な人間性と真面目な余人格と主体的資件の真剣さで対坐、大聖人もおツシから出て ケサコロモもぬぎ、風邪ひかぬよう温かに着こなし、あぐらでもかいてトックリときいていただき、話していただく。……そうすれば きっと、

△あっぱれな天晴れぬれば地明らかニテンイチロクよいこときいた

△あらふしぎニ・一六生れ出た彦と姫たち日の本に満つ

△日の一字いただからは当然とガマンヘンシウあるを許さず

△日の一字いただくためにも当然と我慢偏執あるを許さず

そういう我慢偏執なく考えていくには今の我々が直而している現実をもっと、しっかり見て試みよう。

人間は動物だ。食わなくちゃならん。そうだ。△食うことの保証求めて我々は先祖代々たしか斯う在る。△えらそうな顔をするなよ、食うことの保証の石のあわれすきまで。△食うことの保証があつて社会の面、人格の問題・意味の問題。△食うことの保証は楽な現時点呼吸することの狂ほしいかな。

さて、そうとせば人間は何なのだ。人間の定義を少々考えてみよう。「考える葦」とは西欧の哲人の語「工作人」も、社会的・感情的・計算的・経済的(E・A)等の動物である。自殺できることも笑いをもつことも面の皮の薄い

ことも恥を知ることなど大分デリケートな人間となってくる。さらに自覚的・克己的・そして知己を後世に又は前代に待つことも、歴史をもち、遠いはるかな神聖なあこがれをもち、絶対を問題にするのは、もう人間ばなれのしたこととなろうが。ともかく人間は不思議な動物である。だが神や仏を相手にできない人間ほど頼みにならない悲しい宿命人なのではあるまいか。それが現の証拠に今日的世相を感じてみよう。

生れて三つ四つ、幼稚園から大学まで二・三十年の学校教育、(そうださっきの定義に人間は教育的動物であること。) 幸か不幸か、教育に恵まれた我が日本はどうであろうか。科学文化一辺倒のもたらすもの、当然、万事唯物的・実力的・民主的だ。マルキシズムもE・Aもストも斗争も全く必然コースである。政治はトリヒキと実力、医師には仁術なく算術と技術、教師には教もなく鞭むちもなくアルバイトだけだと非聖宣言してる。自然はキカイにスピードかけて崩壊作業中、ブレーキがどこまでかかるかが今の問題。もっと恐いのは、誰しも個人とは名ばかりで、コレは？ポクは？私は？と反省するヒマがない。考えるコースがわからない。変だとは感じてても誰と話し相う相手も時間もないとしたら、そのいうにいえない憂悶はどう医いやしたらいいのか。ただ酒や煙草や麻薬でまぎらしてすまさすのか。それにつけ入って、コマーシャルTVは秒ごとに攻めつける。ここに於て神を呼ぼうか、「神々の死」はとくに伝えられている。仏にたのむか、仏とは死んだ人のこと。幽霊は怨めしい時にだけ出てくるとしたら、今の世の中は全く、神も仏もないのである。

仏とは本来、めざめた人、自覚者・大覚者である。今の我々が、そういう仏となるべきことを唱導した人が、実は日蓮その人である。時世の恐い怖しい五つの濁の、物質精神ともにヘドロのような時点をめざして出現された宗教なのではなかったか。その人のお言葉に、「國の亡ぶるが第一の大事なり。」とは全くのこと、日本二千年の歴史も

国民も国家もこの通りである。

△皆の衆エンリョはいらん、今すぐと仏と成れよ仏と成せよ。

そういう日蓮大聖人は一体どこから来たのか。

○ 本 地

今想像してみる。この地球の世界をずうっと昔にさかのぼる。まさに、宇宙時代のセカイとでもいう幾千億年の人類生類、動植物の系譜をさかのぼる。いわば生命の本源の

ふかい地層にひそみ 修行しつづけていたボサツさま

久遠実成の釈迦如来さまの ちきちき 新発意しんぱついちのお弟子だそうです。

……と、そういう文章が、人間に読まれ出してから まだわずか二千年、ただ「ふしぎなことよ……おもしろい話よ」というだけのようでした。

それから どうでしょう。今からちょうど七五〇年前に生れた人がこのボサツさまの本性や使命を 人類に紹介して下さったのです。それも ただ筆舌だけでなく、人間行動として、いや面白いドラマとしてです。

それも その大きさといい、仕組みというものが とても不思議で大がかりなのです。現実の時代社会が、そっくり 舞台となり、あらゆる人物も動物も自然も みんな参加する役者であり道具であり観客でもある。というそんな歴史劇の主役だということです。御本人だということです。

始めなき始めから終りなき終りにつづいていくが、ただ未完成の無限連続というでもない。ちゃんと筋は通って 厳粛な論理も結論も実証もある。弁証も意味も、大へんに深くおもしろい。讃歌も添えられ 茶番劇も劇中劇も……

今も現に展開している。ことに今日は、世界人類の殆んどみんなが、一目で見たり聞いたり、遠くは地球のあちら側と互いにもつめあい相談しながら、劇をすすめているでしょう。そして地球上のみんなが観賞もするのですが、それが悲劇か喜劇か俗か聖か惨劇かどうなるかわかりません。それも舞台ごと全部が一蓮托生の運命として大空間を飛ぶ一つの球にあづけ、誰一人のがれようもありません。

たしか 毎日天にかがやく太陽はたった一つだとしても、みんな一人一人にはそれぞれの朝があり夕べがあって、仰いだり拝んだりながめたりしているでしょう。そのようにお互の心の奥につながった幽遠巨大なドラマなのです。

月へは人類の数人が、たしか往って来たそうだし、その他の星へは、これから数年後数十年後の予定に入ってくるらしい。そんな大宇宙の舞台をふまえて、お互い一人一人が一緒に自転公転しつつ、またそれぞれにイミある門舞曲をふるまうている。

まことに、ふしぎな運命に乗りながら、さらに、尊い使命を果すようにというお導きなのだそうです。

テーマの標題はカンタンで「南無妙法蓮華経」と申します。イミは「心から敬ふべき妙法蓮華という経典」奥の意味は「ほんとに讃ふべきふしぎな生類人類の経歴史」とでも申せましょうか。

この超絶した長篇の意味深重の……最も重要な一段を立派に果了えられた一幕の人をたたえて、私どもはこれまでこう申し上げてきました。

南無末法唱導師本化上行高祖日蓮大菩薩

(已上)

そえうた一つ

△ごみあくた へどろも おのが みのあかよ みそぎのうみの たえのうらなみ